

東南アジア研究センター 1966年度第4・四半期報告

1967年1月から3月にいたる1966年度第4・四半期の、東南アジア研究センター活動状況を要約報告する。

現地調査研究としては、前期につづき、**バンコク連絡事務所**の所長石井米雄助教授が、タイ国近代史の研究をすすめ、また福井捷朗大学院学生（農・植物栄養学）と高谷好一研究生（工・地質学）も、それぞれタイで定着研究を行なった。福井大学院学生は2月に帰国。また、昨年12月くらい、東パキスタン、カンボジアで水田土壌を調査していた川口桂三郎教授と久馬一剛助手（農）も、同じく2月に帰国した。畜産研究のため、西川義正教授（農）は1月にマレーシアに短期間赴き、同行の佐々江洋太郎大学院学生は、そのまま残ってクリアン畜産試験場にすみこみ、実験調査をすすめている。また、灌漑排水の調査のため、富士岡義一教授は海田能宏大学院学生（農）をとめない、3月にタイ・マレーシアに出発した。なお、海外技術協力事業団からタイ医療協力を派遣され、ブリラム県で医療協力の基礎をきずいた寺松孝助教授（結研）は2月帰学した。

交換計画として、昨年8月カンボジアへ行った坂本恭章助手（東京外大AA研）につづく1966年度留学生派遣はおくれていたが、1月に、野口英雄大学院学生（工・建築学）がインドネシアのバンドン工科大学、法貴誠大学院学生（農・農業機械学）はフィリピンのロスバニヨスにある国際稲作研究所（IRRI）に出発した。なお西占貢教授（医）は、インドのアグラにおけるライ学会出席とタイでの医療協力実施状況調査のためセンターから派遣された。

なお、マレーシア大学における外務省寄贈「日本研究講座」の教官として森口兼二助教授、栗本一男助手（教育）および前田成文大学院学生（文・社会学）のチームが2月に赴任した。三氏とも当センターで研究を担当しており、われわれのマレーシアでの調査研究活動に応援していただけるであろう。

出版計画では、『東南アジア研究』第4巻第3号および、昨年10月開催された東南アジア医学シンポジウムの特集としての同巻第4号の刊行をみた。

最後に、昭和42年予算内示によると、センターに新たに社会構造研究部門と資料部とが設置されることとなる。専任スタッフの充実を強く要望していただけない、嬉しく思う。ひとえに、関係者各位の好意のたまものであると深謝している。

いま東南アジア研究第1期5カ年計画のうちの第4年度を終わる。諸計画はほぼ順調に進行してきたものと思う。第5年度には、これまでの研究の成果の公刊と、第2期5カ年計画の作成とに全力をそそぎたいと考えている。みなさまの御支援を切にお願いするしだいである。

1966年3月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍